

日本名作名文ハイライト

草鞋の話旅の話

『樹木とその葉』より

若山牧水

朗読 大石佳世

出所 佳世のお話(1)

<http://www.voiceblog.jp/yokoyama34rounana/>

teabreak 編

草鞋の話旅の話〜 『樹木とその葉』より 若山牧水

私は草鞋を愛する、あの、枯れた藁で、柔かにまた巧みに、作られた草鞋を。

あの草鞋を程よく両足に穿きしめて大地の上に立つと、急に五體の締まるのを感じる。身體の重みをしっかりと地の上と感じ、そこから発した筋肉の動きがまた実に快く四肢五體に伝わってゆくのを覚ゆる。

呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分の身體のために動かされた四辺の空気が、いかにも心地よく自分の身體に触れて来る。

机上の為事に勞れた時、世間のいざこざの煩わしさに耐えきれなくなった時、私はよく用もないのに草鞋を穿いて見る。

二三度土を踏みしめていると、急に新しい血が身體に湧いて、そのまま玄関を出かけてゆく。実は、そうするまではよそに出懸けてゆくにも億劫なほど、疲れ果てていた時なのである。

そして二里なり三里なりの道をせつせと歩いて来ると、もう玄関口から子供の名を呼び立てるほど元気になっているの

が常だ。

身體をこごめて、よく足に合う様に紐の具合を考えながら結ぶ時の新しい草鞋の味も忘れられない。足袋を通してしつくりと足の甲を締めつけるあの心持、立ち上った時、じんなりと土から受取る時のあの心持。

と同時に、よく自分の足に馴れて来て、穿いているのだからいないのだから解らぬほどになった時の古びた草鞋も難有い。実をいうと、そうなった時が最も足を痛めず、身體を労れしめぬ時なのである。

ところが、私はその程度を越すことがしばしばある。いい草鞋だ、捨てるのが惜しい、と思うと、二日も三日も、時とすると四五日にかけて一足の草鞋を穿こうとする。そして間々足を痛める。もうそうなることよほどよくできたものでも、何処にか破れができているのだ。従って足に無理がゆくのである。

そうなった草鞋を捨てる時がまたあはれである。いかにもここまで道づれになって来た友人にでも別れる様なうら淋しい離別の心が湧く。

『では、左様なら!』

よくそう声に出して言いながら私はその古草鞋を道ばたの

草むらの中に捨てる。独り旅の時はことにそうである。

私は九文半の足袋を穿く。そうした足に合う様に小さな草鞋が田舎には極めて少ないだけに（都会には大小殆んどなくなっているし）一層そうして捨て惜しむのかも知れない。で、これはよさそうな草鞋だと見ると二三足一度に買って、あとの一二足をば幾日となく腰に結びつけて歩くのである。もつともこれは幾日とない野越え山越えの旅の時の話であるが。

そうした旅をツイこの間私はやって来た。

富士の裾野の一部を通過して、いわゆる五湖を溯り、甲府の盆地に出で、汽車で富士見高原にある小淵沢駅までゆき、そこから念場が原という広い／＼原にかかった。八ヶ岳の表の裾野に当るものでよく人のいう富士見高原なども謂はばこの一部をなすものかも知れぬ。八里四方の広さがあると土地の人は言っていた。その原を通り越すと今度は信州路になつて野辺山が原というのに入った。これは、同じ八ヶ岳の裏の裾野をなすもので、同じく広茫たる大原野である。富士の裾野の大野原と呼ばれるあたりや浅間の裏の六里が原あたりの、一面に萱や芒のなびいているのと違って、八ヶ岳の裾

野は裏表とも多く落葉松の林や、白樺の森や、名も知らぬ灌木林などで埋っているので見た所いかにも荒涼としている。ちようと樹木の葉という葉の落ちつくした頃であったので、
一層物寂びた眺めをしていた。

野辺山が原の中にある松原湖という小さな湖の岸の宿に二日ほど休んだが、一日は物すごい木枯であった。ああした烈しい木枯はやはりああした山の原でなくては見られぬと私は思った。そこから千曲川に沿うて下り、御牧が原に行った。

この高原は浅間の裾野と八ヶ岳の裾野との中間に位する様な位置に在り、四方に窪地を持って殆んど孤立した様な高原となっている。私は曾って小諸町からこの原を横切ろうとして道に迷い、まる一日松の林や草むらの間をうろ／＼していた事があった。

そこから引返して再び千曲川に沿うて溯り、終にその上流、というより水源地まで入り込んだ。ここの溪谷は案外に平凡であったが、その溪を囲む岩山、及び、到る所から振返って仰がるる八ヶ岳の遠望が非常によかった。

そしてその水源林を為す十文字峠というを越えて武蔵の秩父に入った。この峠は上下七里の間、一軒の人家をも見ず、ただだ間断なくうち続いた針葉樹林の間を歩いてゆくのである。

る。常盤木を分けてゆくのであるが、道がおほむね山の尾根
づたひになっているので、意外にも遠望がよくきいた。近く
甲州路の国師岳甲武信岳、秩父の大洞山雲取山、信州路では
近く浅間が眺められ、上州路の碓氷妙義などはあたかも盆石
を置いたがごとくに見下され、ずっとその奥、越後境に当っ
た大きな山脈は一 斎に銀色に輝く雪を被っていた。

ことにこの峠で嬉しかったのは、尾根から見下す四方の沢
の、他にたぐいのないまでに深く且つ大きなことであった。
しかもその大きな沢が複雑に入りこんでいるのである。あち
こちから聳え立った山がいずれも鋭く切れ落ちてその間に深
い沢をなすのであるが、山の数が多しだけその峽も多く、そ
れらから作りなされた沢の数はほんとに眼もまがうばかりに、
脚下に入り交って展開せられているのであった。そしてそれ
らの沢のうち特に深く切れ込んだものの底から底にかけては
ありとも見えぬ淡い霞がたなびいているのであった。